かるむし

74

麻生区文化協会会報

麻生区の風物紹介
「麻生区役所 中庭」

区役所正面玄関前を右手奥に進むと「中庭案内図」に出合います。

①**あずまや** 中庭の奥に位置する「あずまや」はどなたでもご利用いただけます。あずまや周辺には梅の花や河津桜などが植わっており、春にはゆっくりと休むことができます。

②**広場** 「岩組流れ」には昔は水が流れていました。今は水が流れていないことから広場へと姿を変えました。クッション性に優れるゴムチップ舗装により安心してご利用いただけます。周囲の石を腰掛けにして休憩することもできます。

③**ヤマユリ植栽地** 中庭中央の玉縄桜の根元には句の花ヤマユリが植えられています。ヤマユリは、区制30周年を記念し2012年に区の花に制定されました。

庭全体が大きな石や年輪を感じさせる立派な樹木に四方が囲まれています。現在では水のない池や川、枯山水の庭園を見るようです。一段と高い西側の斜面には、一本の松の木が庭を見下ろす如くそびえています。開発前の地形の一端が伺えるようです。

文化センター側からは、水のない川の上に2本の橋が架けられるなど、庭全体がバリアフリー化されていて、子ども連れや高齢者にも利用しやすくなっています。周囲には紅梅、白梅、河津桜。中央の玉縄桜には「寄贈中島豪一氏」(当時の土地提供者)の表示。3月初めには、見事な花見が楽しめます。またヤマモモ、カリン、キンカンなどいろいろな果実もあります。ヤマユリは、あさおヤマユリ栽培普及会が担当し、野草栽培コーナーや草花の維持は、ボランティアの方々に支えられ、四季折々の変化が感じられます。

中でも良いのは「東屋」です。昨年、区制40周年を契機に中庭の利用活性化計画を立てた区に対し，麻生区町会連合会が、会の40周年記念事業の一環として東屋のリニューアルを行って寄贈したのです。すっかり美しく立派に蘇った東屋はフラットで利用しやすく、横長の大型テーブルには長椅子2脚が新たに設置され、訪れた方々がゆっくりとくつろげるひとときの憩いの場、広場となっています。

(文／橋本 周、絵／佐藤 勝昭)

からむし第74号のラインナップをご紹介します

P1 麻生区の風物紹介
麻生区区制40周年を記念して区役所中庭にある東屋が新しくなりました。**橋本周**さんの文章と**佐藤勝昭**さんのスケッチ画で紹介します。

P2 麻生区文化協会40周年を目前に
麻生区文化協会の会長を10年にわたって務めてこられた**菅原敬子**さんが、「新しい風と創造」についてのこれまでの取り組みとこれからについて熱く語ります。

P4 『芸術の町』を目指して
専門委員で劇団「わが町」の芸術監督としてアートセンターで「わが町しんゆり」の公演を10年にわたり続けてこられた**ふじたあさや**さんに、麻生区の文化活動への思いを寄稿いただきました。

P5 地域への想いとわが人生
役員で、寺子屋など地域の教育に貢献しておられる**井上俊夫**さんが、自らの二刀流人生について語ります。

P6 秋の文化講演会報告
文化サロン部では川崎市市制100年を記念して、**千坂隆男**さんによる「麻生の自由民権運動」についての講演会を行いました。

P7～8 麻生区文化協会の行事報告
今年度後期の行事から、文化祭(邦舞邦楽・俳句大会・麻生フィル・吟舞吟詠・美術工芸展・洋舞)、あさお古風七草粥の会、**小川信夫**さんの文化講演会、アルテリッカ新ゆり美術展について報告します。

会員の活躍
第10回あさお写遊会の報告。

文化協会のこれから
2024年度の行事、総会、デッサン会、夏休み親子教室など。

編集後記

―川崎市市制100周年―

麻生区文化協会40周年を目前に

会長　菅原　敬子

令和6年を迎えました。正月早々、能登半島地震、日航機の海保機との衝突・炎上など心痛むことが続きました。お亡くなりになった方々に心よりお悔やみを申し上げるとともに、一日も早い復旧がなされることを祈っております。

◆市制100周年・緑化フェア

川崎市は今年市制100周年を迎えるとともに「全国緑化フェア」が市内のあちこちで開催されるなど、わくわくしそうな事業が展開されることになっています。

菅原敬子会長

麻生区は川崎市でも一番広く緑を保有しており「みどりと芸術」を中心に街づくりを進めていることから、大きな期待が寄せられています。

おいしい空気と「文化・芸術」のかおりのする新しい区名でありながら、歴史を踏まえて重厚な区の良さをも感じていただければと思うのです。

◆歴史を振り返ってみると

―知っていますか、麻生区の「アサオ」の誕生・区名の由来について―

1981（昭和56）年、多摩区から分離し新区となりました。その名称を検討するため、区名選定委員会（28人）が設けられ、居住者から区名の募集をしました。その結果は

柿生区―4256通
百合区―436通
山手区―268通
麻生区―156通

で、柿生区が応募の約60％を占め、麻生区は2％でした。それなのに区名選定委員会はなぜ新区を「麻生区」と名付けたのでしょうか。

それは、「麻生（あさお）」が歴史的な由来に価値があり、新区の名前にふさわしいという理由でした。その価値ある歴史的由来とは何でしょうか。

1982（昭和57）年、麻生の名が区名となって思わぬ波紋が起きました。それは全国多くの麻生の呼び名が「あそう」なのに、なぜ「あさお」なのかということでした。

古来、この地では「麻生（あさお）のお不動様」と呼ばれていましたし、「あさお」のルーツを万葉集東歌に見ることができます。

「麻苧（あさお）」らを麻笥（おけ）に多（ふすさ）に積まずとも明日着せざめやいざ小床に」

これは755（天平勝宝7）年の東歌に納められた歌です。当時の貧しい農民は野山に自生する苧を貯めての生活だったことが伺われ、この麻苧（あさお）の苧（お）が麻生の地名に関わることから選定された歴史的価値だとされています。

◆「地名の重要さ」について

地名を守る会を結成し、川崎に「日本地名研究所」を設立した故・谷川健一先生（2013〈平成25〉年死去・享年92歳）が1991（平成3）年、「からむし第10号」に寄稿してくださっておりましたので再掲します。

日本地名研究所から出版されている書物

＊　＊　＊

カルチュアという言葉は耕作や祭祀に由来するといわれている。祭りをおこなう神社の「社」は土地の神のことである。このように、文化は大地と切っても切れないつながりをもつ。大地を母胎として生まれたものが文化である。したがって大地に根ざさない文化はその名に値しない。

デラシネ（根無し草）と呼ばれる人たちの生活が文化を形成することはあり得ない。どのように格好よく見えようともそれは一時の風俗として過ぎ去り、消えゆくだけである。

地名は大地の母斑である。辞書を引いて見よう。母斑の項に次の説明がある。「先天的の原因で皮膚に現れる褐色または黒色の斑紋の総称」。この母斑によってその母なる大地の特徴が推察できるのである。母斑を消し去ればその大地がどのような貌をもつ母であるかを云い当てることはできない。

このように重要なものであるにもかかわらず地名はややともすればないがしろにされてきた。そして古い地名を無雑作に葬り、新しい地名を安易に受け入れた。これは日本の高度成長期から始まった住居表示法の施行によるところが大きい。また耕地整理によっても多くの地名が姿を消した。母斑をもたない大地、それはもはや母なる大地ではない。母体の役割を果たさなくなった大地から文化の生まれる気がしない。

住居表示法は1962年に実施された。そのあと日本の都市を襲った地名改悪の嵐に抗して私は全国組織の「地名を守る会」を結成した。3年後の1981年には川崎市に日本地名研究所を設立し、今年で十周年を迎えた。私たちが早くから抱いていた日本地名博物館の構想もやっと具体化し、設立される場所も決まった。私ども日本地名研究所は川崎市と協力して、その実現に向け努力している。

今、私どもは二十世紀の終末期に立ち会っている。この世紀末の感を

ことさら深くさせるものは、日本社会の混迷である。連日のように新聞やテレビで報道される情報に私どもはうんざりし絶望の色を濃くしている。

かつて日本人は名誉と誇りに対する敏感な民族であった。それをいつ捨ててしまったのか。日本社会の品位はいつからこのように低下してしまったのか。

それを回復するにはどうしたらよいか。日本人の民族としての自負心を奮い起こし、日本人のアイデンティティ（自己確認）を探し求める道はあるのか。その一つの手がかりが地名であると私は思う。地名は大地の上に撒かれた星である。星々の光が古くかつ新しいように地名もまた最も古く最も新しい文化財である。このかけがえのない文化を守らずして、日本の文化を論ずるのはおこがましいというのが私の確信である。

谷川 健一（日本地名研究所所長）

＊ ＊ ＊

以上、歴史を振り返ってみたとき、地名について述べられた大変貴重な文だと思いここに掲げました。「麻生区」が誕生した意義が伝わってくるからです。

◆麻生区文化協会の目指すところ

麻生区文化協会は、分区から2年遅れで1984（昭和59）年11月に設立されました。それ以来、新しい街・芸術文化のかおる区づくりを標榜して取り組んできました。。

2022（令和4）年12月、藤田直哉（日本映画大学准教授）、武濤京子氏（昭和音楽大学客員教授）のお二人が研究発表されたテーマ「しんゆり芸術のまちづくりのこれまでとこれから」によれば、新百合ヶ丘は伝統的農業や林業を中心としてきた地域を開発した新興住宅地であり、富裕層も多く住んでおり、地理的にも音楽大学、映画大学の集積と芸術や文化活動に活用できる建築物も公共的建築物もあることなど、新都心、新百合ヶ丘周辺地区における芸術のまち構想は生まれるべくして生まれたといえると述べておられます。また、文化の町・川崎を全国に響かせようという声に「川崎・しんゆり芸術祭（アルテリッカしんゆり）」も2009（平成21）年にスタートしたことは、当然の盛り上がりによるものであったとも述べておられます。そして、歴史を積み上げ，今年で15周年を迎えることになっています。

私にとって、お二人の論文と報告、特に「新百合ヶ丘の芸術・文化活動の評価」についての分析は大変参考になりました。

武濤先生のアンケート結果を見ると、前に掲げた取り組みを「非常に評価している」8・3％、「評価している」46・3％という、芸術文化活動への市民の評価が高いということです。評価する理由として。①シルバー層は「精神的に幸福になった」、②ミドル層は「子どもたちへの教育の機会を提供してくれるから」40・7％、③ヤング層は「芸術文化についての情報が入りやすいから」42・1％と回答しています。

今後の「新百合ヶ丘の芸術文化の方向について」をみると、①シルバー層・②ミドル層は、「総合芸術文化の街になること」「若いアーティストの活気溢れる街になること」「実践型の芸術文化の街になること」を期待すると答えています。一方、③ヤング層は「総合芸術文化の街に」「町田や世田谷などからも集客できる広域のサービス圏になること」28・8％、「若いアーティストの活気溢れる街になること」27・1％と、ヤング層にも認知され、「参加のきっかけを作ってほしい」との期待が高いにもかかわらず芸術文化団体の若者の認知度が低く、極めて深刻な状況だと分析しておられます。既存の芸術文化はヤング層にアピールしにくくなっており、新しい挑戦をせねばならない時期に来ているというのです。

伝統をも結びつけ、さらなるチャレンジが必要な時期に来ているのではと思うのです。

「芸術・文化は子どもたちへの教育の場になっている」と答えた若い層は31・3％、3位でした。これら若い親たちがいることを把握して進めるべきだと、先生方お二人は調査・聞き取り・アンケートの集計結果を述べておられます。文化協会の今後のあり方・方向性も見えてくるように思えます。

文化協会が「あたらしい風と創造」を目指してきた10年。伝統文化の継承や文化・芸術・創造・表現活動は、文化の振興を促すだけでなく、人と人のつながりを生み出し、人々に潤いを与え、芸術・文化活動を通じた人づくり、まちづくりにつながるような活動や事業の展開をしてきたつもりです。芸術・文化を知ることは自分を高める・学ぶことでもあります。消してはならないモノはしっかりとつなげること、そこから新しい物が生まれ、つながっていくのだと思うのです。

次の10年に向け、文化協会も一歩、ワイワイガヤガヤ話し合いながら進んでいきたいと思うのです。

文化活動の一つとして行ってきた文化講演会の様子

◆今後課題とすべき事柄は

①会員の高齢化は避けられない事実ですが、絵でも歌でも楽器でも写真でも書道でも発表の機会があるなら出してみようという方の大募集をする。

②8大学との連携や地域活動をしている他団体とも連携に取り組む。

③新しい発想を持った新たなイベントや活動グループ等とタッグを組む。

④2030（令和12）年を目指して進めている地下鉄3号線と芸術文化まちづくりの観点を持って参加協力する。等ではないかと考えています。

皆様が考える住みやすいまちのイメージは多様だと思いますので、区民や事業者の皆さんと地下鉄ルート周辺のまちづくりについて意見交換していければと考えています。

40周年を迎える来年度、30周年記念誌につなぐ「まとめ」の発刊を期待するところです。

『芸術の町』を目指して

文化協会専門委員
ふじた　あさや

『からむし』から、執筆依頼のお手紙を頂いた。「お、『からむし』だ」と思った途端に、浮かんだのは父の顔だった。『からむし』の創刊号を私に見せながら、「こういう機関誌ができたんだ。どうだ、いいだろう」と、自慢げだった父の得意顔を。その頃父は、多摩区文化協会の会長から、分区で麻生区文化協会を作り、その初代会長になって間もない頃だった。

父・藤田親昌は、戦時中の中央公論編集長だった。40代半ばで編集長というのはいかにも早いが、それには理由があった。当時は、戦争遂行のための標語をすべての雑誌が表紙に刷り込むことになっていたが、中央公論は刷らなかった。その責任を追及されて、編集長の首が飛んだ。その結果、若手編集長が誕生したのである。そんな時代だった。折があれば、必ずしも戦争に協力的でないジャーナリズムは叩いてやろうと、軍部も警察も狙っていた。そんな中で、神奈川の特高警察が手柄を立てようと事件をでっち上げた。当時非合法化されていた共産党の再建を企んだという理由で、多くのジャーナリストを含む60人余りが逮捕され、拷問され、獄死者が4人も出るに及んで、特高のでっちあげた供述書に署名させられた。父もその一人だった。これが横浜事件である。逮捕されて1年後に、父については犯罪行為はなかったとされて帰されたが、特高の拷問で歯は全て無くなり、身体中痣だらけだった。

特高刑事たちは、編集者たちには「小林多喜二の二の舞になりたいのか」と脅迫して作文に署名を迫ったそうだが、多喜二の死に様を知っている編集者たちには、充分に恐怖を与えたことだろう。その恐怖に勝てず、特高の言うままに作文を認めてしまった自分たちの弱さを、父は繰り返し口にしていた。「そんなことになる前に、どうして止められなかったのかな」とも言っていた。戦争を止められず、多数の犠牲を出したのは、言論を担っていたジャーナリストの責任だと、父は折にふれて口にしていた。戦後やっていた出版社を閉じて、川崎に来てから、教育委員や社会教育委員をを引き受け、文化協会を作って文化振興に力を尽くしたのもその流れである。「戦争を止めるのは文化だ」と、父は口癖のように言っていた。川崎に民家園を作るために飛び回ったり、日本映画学校を誘致するために走り回ったりしたのは、その延長である。晩年は、新百合ヶ丘を『芸術の町』にできないか、と誰彼なしに語っていた。

私が今日あるのも、もとはと言えば、戦争のせいである。戦時中の私は、日本中の子どもがそうだったように、軍国少年だった。毎月8日の開戦記念日には区内の神社を巡って戦勝祈願をし、将来は兵隊になってお国のために戦い、「天皇陛下万歳！」と言って戦死するのだと思っていた。唯一心配だったのは、直撃弾を受けて「天皇陛下万歳」を言う暇もなく死ぬことだった。そう思わせたのは、教育の成果である。だから、戦争が終わった時、教科書の戦争を賛美する部分に墨を塗らせて、「この部分は教わらなかったことにしてほしい」と教師に言われたとき、「よくもだましたな」と思った。一生かけてこの復讐をしてやるぞ、と決意した。私が、放送作家として教育番組や子どもの時間をもっぱら担当し、劇作家・演出家として再三教育現場をテーマにし、児童対象の作品を数多く作り、選ばれて世界児童青少年演劇協会の副会長までやったのは、その復讐のためだった。

戦時中の体験で、もう一つ忘れられないのは、疎開体験である。私は伯母のところに疎開したが、そこで強烈な体験をすることになった。東京生まれ、東京育ちの私は、革靴も運動靴も持っていたが、疎開先のその村の子どもたちは、靴を持たず、全員が藁草履だった。私の靴は早速用水路に投げ込まれた。持っていた顕微鏡も壊された。男手は兵隊に取られていたので、小学生までが、麦刈りや薪採りに駆り出されたが、何の働きもない私はクラスの邪魔者でしかなく、そのくせ成績は抜群だったから、いじめられるのは当然だった。この経験で私は、この世界にはさまざまな価値観があると知り、自分は世の中で何の役に立つだろうかと、絶えず自らに問うようになった。

その延長で、父の背中を見ていた私は、自然に、川崎で何ができるかと考えていた。

たまたま、かわさきヤングミュージカルに作品を提供したのがきっかけで、手伝ってもらった昭和音楽芸術学院から声をかけられ、ミュージカルコースを短大へ、そして4年制大学へ発展させる時期を教授として担当することになった。それは、昭和音大が地域で何ができるかを探る時期でもあった。

ちょうど、アートセンターの建設が進められている時期だった。そのための委員会に呼ばれて、小劇場の設計に意見を言わせてもらった。私の意見は、残響時間を短くして台詞を聞きやすくすることと、舞台から観客全員の顔が見えることだった。それが演劇専門劇場の条件だというのが、私の考えだった。劇場を利用して市民に演劇を体験してもらいたいと、市民参加の演劇作りが発信事業になった。それが『劇団わが町』で、以来12年間、私は芸術監督として、市民の劇作りに関わっている。演劇は観るだけでも他人の身になれるもので、人を育てる力を持っているが、演ずることによる教育的効果は、他の芸術ジャンルをはるかに超えるものがある。それを、もっと効果のあるものにするために、私は参加者の募集に年齢制限を設けないことにした。同年齢に生まれる競争心を教育効果を高める手段にしている日本の教育に異を唱えて、異年齢集団を作っているのだ。今のところ、その効果は抜群である。

一方で私は、アルテリッカしんゆり（川崎・しんゆり芸術祭）の旗揚げ以来、役員をやってきた。分野別の芸術祭は数多いが、アルテリッカのように、表現芸術の各分野がそろう総合芸術祭は類がない。そういう異色の芸術祭を成立させているこの地域は、異色と言ってよい。

『藝術の町』を唱えていた父の思いは、少しは実現したと言えるだろうか？

会員の活動紹介

地域への想いと我が人生

井上 俊夫

13年ほど前になりますが、当協会のH氏と奉仕活動団体でご一緒させていただきました。そのご縁で麻生区文化協会のメンバーとして活動させていただいております。当初はお手伝いと考えていましたが、4年ほど前に入会させていただき、会計を担当しております。

H氏は社会教育関係でもパワフルに活動されており、麻生区地域教育会議・旧麻生市民館運営審議会などで活躍されていました。十数年前から共に活動させていただき、現在に至っております。

この度、「人生の振り返りと、地域・社会教育への想い」について、寄稿させていただく機会を得ました。まずは半世紀ほど前の記憶をたどり、述べさせていただきます。

◆「二種兼業農家」の時代

私は「トヨタ2000GT」に憧れ、自動車の開発に携わりたいと考え、現在のT東日本に就職しました。幸い設計部署に配属され、セダン・ワゴン・救急車などいろいろな車を担当することができました。当時は高度成長期で開発車種は増加の一途をたどりました。設計手法は旧来のままであり、手描きで、精度を要求されていました。残業100時間は当たり前で、家で子どもと遊んだ記憶が余りありません。

10年を過ぎた頃、車の開発はコンピュータを活用して、開発期間の短縮と精度向上を図る計画が出されました。新職場で新しい仕事にチャレンジしようと手を挙げて、異動しました。

ちょうどそのタイミングで、父親が他界して、農地を相続しました。田んぼの稲作は学生の頃から担当しており自信がありましたが、畑は経験が無く、妻が野菜作りをしていました。農地相続は20年間耕作し作物を作ることが課せられており、雑草との戦いの日々でした。

「二種兼業農家」として、会社の新しい仕事と農業の両立の大変さが身に沁みて、身体が二つ欲しいと思っていました。

いつの頃からか「48歳で会社を退職」しようと人知れず計画を練っていました。準備のため、会社でとれる資格（自動車整備士、職業訓練指導員、危険物取扱など）は全部取得し、更に電気工事士取得のため、休日になると電気工事店の仕事を手伝って、2年間のチャレンジで取得しました。計画より遅れましたが、55歳で退職しました。

◆電気設備業の創設

個人事業としてスタートしましたが、退職した元の会社役員から「新子会社設立にあたり、技術部門を任せたい」とのオファーがあり、個人事業として引き受けました。仕事内容は電設業ではなく、技術者の採用・教育を行い、T社・関連会社への技術者派遣業務でした。具体的には国内全域で新卒・中途の技術者と面接・採用し、設計や実験、生産技術の教育を1カ月間行い、派遣することです。結果として5年間で約500人と面接して延べ300人を派遣しました。また事業拡大により、中国上海に代表処を創設し代表として延べ約3年駐在しました。部門ではトップとして時間は比較的自由でしたが、前にも増して忙しかったと記憶しています。

この間も、畑での雑草との戦いは続いていましたが、野菜作りの知識と経験が増えていきました。農地を守らなければならない、との「負の気持ち」から、徐々に野菜の作付けが増えて、新しい野菜作りにチャレンジできるようになっていきました。

◆地域ボランティア

個人事業のスタートと同時期から、地域ボランティアを始めました。産まれてから半世紀以上この地域で生活していながらも何もせずに過ごしてきたので、自分にできることで地域への恩返しのつもりで、ボランティアデビューをしました。

①町内会活動

町内会活動は、延べ20年の間に、10年間会長を務め、安全・安心なまちづくりをベースとして地域行事や町内美化を進めてきました。1000世帯の会員と共に、防災訓練やバスで施設を見学する防災研修の実施、地域行事として「どんど焼き」の復活など、多忙を極めていました。また町内会連合会を始め区役所関係の会議など週2～3回役所・周辺に出勤していました。忙しい中にもやりがいを感じており、工夫次第でいろいろな活動ができることを学びました。

②稲作を通じた地域活動

親から引き継いだ「田んぼ」ですが、約半世紀にわたり、稲作を続けてきました。周辺の田んぼは都市化で宅地になり王禅寺地域では私の田んぼだけになってしまいました。ここ数年は、うるち米（はるみ）と餅米を作付けしていますが、気候変動の影響を直接受けるため、毎年新たな気持ちで挑戦しています。

子どもたちへの稲作指導は、40年前になりますが、中学校の先生が通勤途中に「田植え」を見て、「子どもたちにも見せたい」と依頼してきたことに始まります。その2年後には、「田植え、稲刈りの体験をさせたい」とのことで体験活動が本格的に始まりました。

子どもたちにとって、地域は「ふる里」であり、育つ過程での稲作体験は貴重な経験になるのではと考えて、稲作指導を続けてきました。

現在、私の田んぼでは近くの小学5年生が毎年稲作を行っています。その他に麻生区内の二つの小学校は、校内に小さな田んぼがあり、指導もしています。

今後も稲作体験を通して、子どもたちが「ふる里」を感じることが出来ればと思い活動を続けていきます。

秋の文化講演会報告

「自由民権運動と麻生」千坂隆男さん大いに語る

文化サロン部　板橋 洋一

◆はじめに

川崎市が市制100周年を迎えるにあたり、文化サロン部では11月13日、麻生の歴史に詳しい本会専門委員の千坂隆男さんをお招きし、「自由民権運動と麻生」というタイトルで講演をしていただきました。

現在、市を中心にさまざまな地域で100周年に因む行事が展開されています。現在の麻生区域が編入されたのは、1924（大正13）年に市制が敷かれてから遅れること15年の1939（昭和14）年。都築郡の分割併合により川崎市に編入されたと記されています。

今回のテーマは「自由民権運動」。1868（明治元）年の明治維新後、封建体制からの変革を進める明治政府に対し、不満を抱く士族が各地で反乱を起こし、1877（明治10）年の西郷隆盛の西南戦争を以て武力闘争は収束しますが、前後して言論で政府や国民に訴える人たちも生まれました。

講師の千坂隆男さん

百円札の肖像になっている板垣退助らは1874（明治7）年に国会を開設し、国民の政治参加の権利を求める「民撰議院設立建白書」を政府に提出するなど、各地で新聞を発行、演説会などの開催を通じ、自由民権運動が展開されていきます。そして1885（明治18）年に千円札の肖像にもなった伊藤博文が初代首相となり、議員内閣制度が発足します。

その後、日本の近代化は、富国強兵、帝国主義化が進み、植民地化を求める戦争が続きますが、川崎市は軍国主義化が進む中で生まれ地域を拡大する時期にあたっています。

千坂さんは、川崎市100年を数えるその前史として、どのような民衆の動きがあったかを示す古文書や文献を参照にしながら、熱っぽく語られました。

熱心に講演に耳を傾ける参加者

◆柿生の自由民権運動

「江戸時代後期、1800年代に入り、幕府は関東地方の治安強化のために、関東取締出役を置き地域に組合を作り、その中心になる村を寄せ場（日雇い労働の求人業者と求職者が集まる場所）としました。

天保時代の資料によると、現在の川崎市域では、橘樹荏原郡には川崎、橘樹豊島郡には上小田中、橘樹多摩郡には溝口、都築多摩郡には小野路（町田市）に寄せ場がありました。

そのことから柿生の自由民権運動は都築郡に包摂されました。栗木の飯塚民右衛門、黒川村の立川林平、梅沢象太郎といった名前が文献に載っています。また片平の荒井仲次郎、中山作造、神藤喜平、村野勇次郎、栗木の鈴木撰四郎らが自由党員として名が挙がっています。

そして、1893（明治26）年11月当時の自由党機関紙に、修廣寺で河野廣中らの党幹部を招聘して千人を超える大演説会を催したとの記事が掲載されています。町田市には自由民権運動資料館が開設されていますが、政治運動でも、現在の麻生区が町田市や横浜市北部など近接した地域といかに連携していたかがわかります」

自由民権運動の演説会　絵の中の人物にせりふをつけてみましょう

小学校5年生の教科書より

◆おわりに

麻生市民館第1会議室に集まった26人の参加者からは、初めて知ることばかりで大変勉強になったとの感想が多く寄せられました。

また千坂さんは、講演の冒頭、資料として出された現在の小学校5年生の歴史の教科書の写しを説明しながら、自由民権運動の挿絵の吹き出し部分が白くなっており、児童にその言葉を考えさせるようになっていることを指し、今の教育は教えるということだけではなく、考えるということを重視していると、かつて小学校教員を勤められていたことから感慨深げに話されたことが印象的でした。

麻生区文化協会の行事報告

第39回 麻生区文化祭

◆邦舞・邦楽公演

10月21日、市民館ホールで7団体と個人13名が出演。第1部21演目、第2部8演目を披露しました。出演者が高齢になり、体調も変化してグループも減少し、番組も少なく少々盛り上がりに欠けました。

◆麻生フィルハーモニー管弦楽団

10月22日、ホールにて、創立40周年記念第77回定期演奏会として開催。指揮に田部井剛氏を迎え、ベートーベン作曲「レオノーレ」序曲第3番、ブルックナー作曲交響曲第5番を演奏。アンケートでは良い演奏で感動したとの感想がたくさんありました。

◆吟舞・吟詠公演

10月22日、大会議室で5団体が参加。詩吟53番、うち剣舞1番、舞踊1番。新たに秀風吟道会の入会で賑やかな大会となりました。

◆洋舞公演

10月5日、ホールで8団体、200人が出演。たくさんのお客様に観に来ていただけて、子どもたちも、やる気になり頑張る姿が見られてよかったです。

◆俳句大会

10月21日、第35回麻生区俳句大会を開催しました。昨年に引き続きコロナ禍中ではありましたが、例年通りの参加者のもと、第1部は応募句439句の中から入賞者9人、優秀賞20句の表彰、記念品授与を行いました。第2部では席題句会が開かれました。今回は麻生区が長寿日本一になったこともあり、長寿や故郷麻生を詠んだ句が多く、この大会が今後ますます皆様に楽しんでいただけることを願いました。

（関森 田鶴子）

【入賞作品】

○川崎市長賞　大橋 政雄
麻生川風が舵取る花筏

○川崎市議会議長賞　北條 雨飩
日本一長寿の里や柿たわわ

○川崎市教育委員会賞　春永 真央
蜻蛉のふはりと風の高さかな

○麻生区長賞　高品 小渓
足るを知る暮し重ねて新茶汲む

○麻生市民館長賞　角田 珠子
思い切り手を挙げて来る夏帽子

○川崎市総合文化団体連絡会理事長賞　都留 嘉男
麦笛や少年はみな風を負ひ

○川崎市観光協会会長賞　井上 美沙子
露草は星の欠片の瑠璃こぼす

○麻生観光協会会長賞　秋場 正美
手際よき庭師の鋏涼しかり

○麻生区文化協会会長賞　馬場 身江子
縞なして田の神渡る青田風

◆美術工芸展

秋水書道会による書の団体展示は、10月27日から11月1日に3階ウォールギャラリーで行われました。美術工芸部に所属する会員による個人展示は1月19日から1月24日に市民ギャラリーで開催され、絵画10点・書5点・工芸彫刻4点・写真6点・いけ花 前・後期各1点が展示されました。553人の来場がありました。

第20回 あさお古風七草粥の会

あさおの風物詩・千食提供

新春恒例の「あさお古風七草粥の会」は4年ぶりに従来の1000食を用意し、1月7日晴天に恵まれ実施することができました。

古風七草粥の会が無病息災を祈って広く区民（市民）へと区役所前広場にて開催したのが2003年から。伝統食文化の伝承をと願いも込めて。この会の特色は、まず、

○粥の中に焼き餅が入ること
○食材や使用する炭などは地元産であること
○草摘み・仕込み・調理全般が会員や地域の方々のボランティアであること
○当日の会場設営も会員を初め関係者・ボランティアによること
○正月気分を盛り上げて下さるお囃子・獅子舞や正月あそび・川崎かるたとり・唄なども地元の方々や団体が出演し、担当されて、来場者も参加し楽しまれること

こうした伝統文化の継承・伝承は継続が大事であり、ここ数年コロナ禍での活動を振り返ってみたいと思います。

令和2年度はコロナ感染症の始まりでした。粥の提供・喫食の自粛です。そこで、この伝統文化を継承し続けることを、パネルと動画で取り組み、区役所ロビーで放映と展示をしました。

令和3年度は、感染防止に主催者側・来場者共に細心の注意を図り、食の提供は例年の半数の500食とし、地域振興課との打合せを重ね、整理券方式をもって人数制限、喫食する席の配慮など工夫し無事実施することができました。

令和4年度は、コロナ禍がゆるやかになる中、この2年間の経験を活かして、テイクアウト200食と会場喫食800食として実施しました。整理券の効果も大きく、区役所職員の皆様に感謝です。

この事業は麻生区の「ふるさと再発見事業」の一つであり、区と共に開催できる強みがあります。

＊ ＊ ＊

そして今回の20回を前にして元旦早々の能登半島の大地震、続く無情の雨・雪が降り続く、被災者の皆様に心を寄せながら、大自然の強大な力の前に人間の無力さを感じながら、せめて「古風七草粥の会」での当日、「能登半島災害募金」活動に力を入れることになりました。募金額82375円は早速、「読売光と愛の事業団」を通じ能登半島被災地へ送金できました。

（副実行委員長　橋本 周）

文化講演会

小川信夫氏が語る 川崎市誕生ものがたり 「百年への贈り物」

3月9日、麻生市民館大会議室において文化サロン部主催文化講演会を開催しました。今年は、川崎市制100周年の記念すべき年に当たり、アルテリッカしんゆり2024の公演として、5月11日(土)・12日(日)に多摩市民館で行われる川崎郷土・市民劇『百年への贈り物』の劇作者、小川信夫氏に講演していただきました。52人の参加者は熱心に聞き入り、講演後のアンケートには「川崎に生まれ育ったにも関わらず、川崎のことを何も知らなかったのでとても面白かった」「先人たちの努力によって川崎の町ができたことを知り、感慨深い講演でとても良かった。市民として誇りを持った」「5月の市民劇を楽しみにしている。ぜひ見たい」などの感想が寄せられ、好評価をいただきました。

講師の小川信夫氏

小川氏は、市が誕生した頃の資料を調査するうち、水道が重要な役割を果たしていると気付き、水道をキーワードとして川崎市誕生ものがたりを市民劇として創作したと語られています。

当時の川崎町長・石井泰助は壮大な夢を持ち、それを実現すべく、工場誘致と道路の完備、そして水道の建設を3本柱として取り組みました。この石井氏の不倒の努力が、今日の工業都市川崎につながっていることを再認識させていただきました。

（井上 俊夫）

アルテリッカ 新ゆり美術展

「アルテリッカ新ゆり美術展2024」は、3月4日～12日、新百合トウェンティワンホールで開催されました。この美術展は、今年16回目を迎えました。麻生区美術家協会は絵画・工芸・彫刻の大作20点を展示、麻生区文化協会は、絵画5点、書5点、工芸・彫刻3点、写真12点、いけ花7流派19人の合作1点、および、民藝の女優さんを描くデッサン会参加者作品14点を展示し、来場者を魅了しました。また川崎ジュニア文化賞を受賞した小学生の作品7点および、生田高校卒業生の絵画2点が特別展示され好評でした。天候に恵まれ期間中1469人のご来場者がありました。

（実行委員長　佐藤勝昭）

会員の活躍

第10回あさお写遊会

今年、あさお写遊会写真展は10回目を迎えることができました。年明け早々のギャラリー幕開けを飾るべく寒い時期に実施してきました。今年も450人を超える来場者を迎えることができました。8人が各々のテーマで4点を出品し全32点を展示しました。来場者からは好評で励ましの言葉もたくさん頂戴しました。また、10年の歩みを記念し、写真集を作ることになり、夏頃から準備を重ねてきました。途中で体調を崩す仲間もいましたが、写遊会の写真だけは何としても用意するという意気込みで乗り切りました。写真集は、各自が撮りためた写真をもとに構成し、タイトルを考え、印刷の色にも拘り、正月の写真展に間に合わせることができ編集責任者として喜ばしい限りです。会場に並べてみると見た目は薄い冊子ですが、8人の思いが込められた写真集としてまとめることができた10周年になりました。さあ、11回目に向かってのスタートです。

（小田島 寛）

文化協会のこれから

2024年度　総会
4月21日(日) 13時
麻生区役所 第1会議室

舞台衣装の女優さんを描くデッサン会
6月15日(土) 麻生市民館 大会議室

夏休み親子教室
7月25日(木)～8月6日(火)
麻生市民館 他

俳句講座
9月10日(火) 麻生市民館 大会議室

麻生区文化祭　麻生市民館
◆10月19日(土)「邦舞邦楽」ホール、「俳句大会」大会議室
◆10月20日(日)「麻生フィル」ホール、「吟舞吟詠」大会議室
◆11月1日(金)～6日(水)「美術工芸展」市民ギャラリー、ウォールギャラリー
◆11月3日(日)「洋舞」ホール

編集後記

年始の能登半島地震で犠牲になった方々に心よりご冥福を祈りたい。そして家を失い厳しい避難生活をしている人々の一刻も早い復旧・復興を願う。麻生区恒例の年頭の七草粥の会では、受付の震災支援の募金箱に、来場者からの温かい思いが多く寄せられた。

今号では、長寿日本一の麻生区にふさわしい文化人の皆様が紹介されている。このような方々の生き方に学びつつ、次代の新しい麻生を目指したい。コロナを乗り越え、既存の活動も軌道に乗ってきた。文化の麻生に恥じない先駆的な組織としての自負を持ち、さらなる発展を。

（小田島 寛）

【編集委員】
井上 俊夫、小田島 紀美、小田島 寛、佐藤 勝昭、関森 田鶴子、橋本 周、横須賀 朝子

麻生区文化協会会報
からむし 第74号
2024(令和6)年3月31日発行
発行人／麻生区文化協会
会長　菅原 敬子
編　集／麻生区文化協会
からむし編集委員会
川崎市麻生区万福寺1～5～2
麻生文化センター内
☎044・951・1300
印　刷／㈱エリアブレイン